

三 中世の五ヶ山



上平村西赤尾 赤尾の道宗開基の行徳寺と丸岡城址 [昭和44年]

(一) 平安末期から鎌倉初期へかけて

平家の一族郎党の
飛驒・越中支配

歴史上、平家全盛のころ、その一族郎党の所領と支配勢力は、全国三十余か所にひろがり、平家方の武士が各地に土着していた（岡村利彦著『飛驒』）。

『斐太後風土記

首巻』の「国宰の」の章によると、飛驒守として次の名が記されている（『木曾軍記』『平家物語』など）。

近衛天皇御代

久安年中（一一四五～五二）

平 景時

後白河天皇御代

保元のころ（一一五六～五九）

平 景則

高倉天皇御代

安元～治承（一一七五～八一）

判官 平 景家

安徳天皇御代

寿永二年（一一八三）

大夫判官 平 景高

も考えられる。

かなり古いところから、五箇（ヶ）山と飛驒の間に交流があつたのであろう。

しかし文書記録による史料は不明であるが、越中へ流れ出る庄川に沿つて、人間の往来と物々交換が多少行なわれていて、隔絶していたとは思われない。

越中においても、平安末期のころに国司として来任した、平家の一族郎党の名が次のように見出される。

国 司	平經盛	年代不詳	大系図
越中少掾	平維基	久安三年（一一四七）	本朝世紀三十二
越中守	平教盛	平治元年（一一五九）	統本朝通鑑 大日本史一四五 公郷補任 <small>仁安三年の條</small>
越中守	平盛俊	安元元年（一一七五）	山槐記 大日本史三八四 平家物語
越中前司	平業家	治承四年（一一八〇）	大日本史三八四 玉葉三十二
越中守	平親長	寿永二年（一一八三）	公郷補任 玉葉
越中守	平親長	公郷補任 玉葉	玉葉三十二
五ヶ山中	山岳仏教	八世紀から十一世紀にかけて、深山幽谷の五箇（ヶ）山にも山岳仏教が栄えた。この山岳仏教の伝播は、五箇山中の開化を促したので文化史的意義が大きい。	
五ヶ山中	山岳仏教	前章の「五箇山の修驗道の山々」に、人形山・金剛堂山・天頂石などについて、詳しく述べたとおりである。	
金剛堂山	金剛堂山	平村においては、毎年六月、人形山の山開きを行ない、青壯年・婦人・小中学生が登拝して、古代の白山信仰が護持されている。	
金剛堂山	金剛堂山	金剛堂山においても同様である。また、婦負郡山田村には、古い登拝路が残っており、行者の宿泊基地の「宿坊」の地名、行者が斎戒沐浴した山田温泉がある。	

(二) 南朝遺臣の五ヶ山入り

1 南北朝内乱期の伝承

吉野朝史の研究

戦時中、高岡市の極楽寺に「越中宮宗良親王奉讃会」が結成され、当時の皇国思想を高

むねなが

揚のために、吉野朝時代の越中の史跡の展望・後醍醐天皇の皇子宗良親王の五箇山通過および潜入説・南朝遺臣畠一族その他の郎党の遁入および南朝再興画策説など、五箇山の中世の動きも採上げられた

(昭和十七年刊「越中吉野朝勤皇史」)。

而して昭和十七年(一九四二)に、上記の奉讃会から「越中吉野朝勤皇史」が刊行されて、当時、県民の関心を集めた。また、上梨の円淨寺の住職故高桑敬親氏は「五箇山誌」「平村史南朝史考」「五箇山史」「五箇山史談吉野朝期」など、数多くの南北朝時代の五箇山に関しての執筆をされている。また、瑞願寺の後方の天皇(主)山を同寺では、南朝の長慶天皇御陵として口承している。すべてが肯定されていないが参考になることが多い。

まず、高桑敬親執筆の『五箇山誌』の第五章「吉野朝方飛驒国司姉小路氏勢力時代」は、
五 箇 山 遺 臣 の 南 ケ 朝 山 入 り 次のように書き起こされる。

「五ヶ山の文化は、吉野朝武士の入籠によって開拓され、五ヶ山の有史は吉野朝からである。現在の五ヶ山の住民は、多分この時代からの落人の末葉である。養蚕・和紙は吉野朝遺臣によって始められ、五ヶ山へ仏教が入ってきたのは吉野朝皇子、天台座主宗良親王によってである(『五箇山総合調査報告書』富)。

五箇山の有史と養蚕と仏教伝播の起源を吉野朝期に帰する説は、かなり問題であるが、現在の五箇山谷の集落形成は同期に整ってきたと考えるべきであろう。なお、上梨白山宮と下梨地主神社の所蔵木像の鑑定、あるいは、五箇山中各村の社寺・民家所蔵の仏像・金属器具などに・永和(谷八幡社蔵)・応永(白山宮蔵)などの古銘があることによ

り、吉野朝期の宗教文化の流入をうかごうことができる（『平村史下』卷一六、五一頁より古文書史料、中世の銘文参照）。

畠時能の末裔

人、畠六郎左衛門時能の一族郎党は、延元三年（一三三八）に越前の藤島の戦で義貞が戦死した後、同国鳥羽野の万法寺に逃避、まもなく脇屋義助（義貞の弟）とともに美濃の根尾に至ったが敗退。畠一族は白川郷へ遁入。ついで五ヶ山に潜居したが南北朝合一後、大鋸屋村に移り、さらに城端に定住したのであつた（畠姓由緒書）。この関係により、五ヶ山・大鋸屋村に越前万法寺の檀家が多いという一因とも考えられる。

越前の和田本覚寺

現在は石川県小松市にあるが、もと越前にあつた和田本覚寺の檀家も、五ヶ山地方に多いが、南朝関係に結ばれるようである。高桑氏の著述によると両寺の開祖はともに、宗良親王の近侍海野喜幸で、五ヶ山中の南朝方武士と呼応し合い、永正年中（一五〇四、二）に越前の大名朝倉家の内訌、家督争いのあおりにて、五ヶ山へ逃避。天台宗から真宗に転向したという。因みに明治五年の五ヶ山村々の戸籍写によると、小松本覚寺の檀家として村数は二二、戸数は二三九、万法寺の檀家として村数一二、戸数一一二と多数を示している。

高桑一族の来住

而して、時能の甥の大夫房快舜の弟、高桑勘解由左衛門快直が五ヶ山中に留まり、南朝の再挙を図り、上平村漆谷の山上に城を築いたが、南北朝合一後、土豪となつたといわれる（『越後志』故墟考）。

その後、文龜二年（一五〇二）、末裔の高桑新兵衛入道道永（還俗して市郎右衛門と改名）が、人形山に祀られていた白山権現菊理媛命を、夢のお告げによって現在の上梨の地に遷座申し上げて、白山宮の御祭神としたとも伝えられる（『昭和十九年「白山社略縁起誌」』）。さらに、同社に後醍醐天皇と畠時能の御靈を祀つたともいう。現在、本村に十余戸、上平村

に七戸の高桑姓を名乗る家があるが、勘解由左衛門の末裔であろう。なお、口碑によると五ヶ山の和紙の起原は、畠氏の郎党が五ヶ山へ来て、生業として越前和紙製法を伝授したことによるという。

建武新政のころ

当時（一三三四～九〇）、姉小路家綱が飛驒国司に補任されていた。飛驒は南北朝の所領二〇か国の一部であった。したがって隣接の五ヶ山の地にも姉小路氏の勢力が及んできて、南朝方の遺臣の主要拠点の一になつたかと思う。

しかし、両朝およびその陣営において、互いに分裂し、味方同志が相対して、集合離散あるいは三、四角関係を生じた。姉小路氏は、南朝方管領細川頼之と結んだがその後、北朝方の斯波義将の中傷により、頼之は斯波氏と交替した。すると、越中守護となつた義将が永和四年（一三七八）四月二十四日、姉小路氏を攻めて降伏させた。このために一時、姉小路氏は北朝方に従属した。そのとき、南朝方の越中守護であつた、頼之の子安芸太郎は五ヶ山にいたが、斯波氏の一族の、能登の吉見氏に攻められて討死した。

この前後、管領斯波氏は、五ヶ山中の南朝軍を懷柔宣撫するため、本願寺第五世の綽如上人を越中に派遣したのであつた。しかし、上人は、明徳四年（一三九三）四月二十四日、謎の非業の死を遂げられた。

口承によると、南朝方の兇刃に倒れ、簞巻にして庄川に投入されたともいう。

南北両朝の合一

明徳三年（一三九二）、足利幕府三代將軍義満が、南北両朝の和平を提議した。よつて、

南北両朝の合一　　南朝の正統性の承認と皇位の両統迭立履行を条件にして、南朝の後龜山天皇が北朝の後小松天皇に譲位され、多年の南北朝の争乱が終結した。

かくして、五ヶ山中に待機していた南朝軍は、その志を失つて、そのまま留まつて永住、あるいは砺波平野部へ移つていったのであつた。

応永の義戦

然るに、義満が当初の合一条件を守らなかつたため、後龜山天皇は吉野に脱出された。このため、南朝の旧臣たちは再興運動を企てて奮起した。「浪合記」という古書によると当五ヶ山においても応永三十一年（一四二四）に姉小路氏が南朝方の砺波郡貴船山城主石黒重行と共に、宗良親王の皇子尹良親王とその御子良王を奉じて、義戦を起こした。しかし、飛驒に進駐していた、室町幕府方の朝倉・甲斐・小笠原諸氏に攻撃されて敗れた。石黒氏は両親王を奉じて、尾張国へ逃走した。その後、重行は尾張国春日郡山田庄に土着したといわれる。かくて姉小路氏も五ヶ山の南朝軍も皆、降伏してしまつた。この時、小笠原氏の配下であつた平瀬權三郎・嘉会坊明誓・内ヶ島季氏らも五ヶ山に進攻してきたが、応永三十四年以来平瀬氏は上平村に留まつて新しい居館を構えて居住したのであつた。

なお、上梨の白山宮に安置されている、僧形木像後頭に応永二年（一三九五）卯月の銘がある。現在、こすれて消えかけているが、以前には、砺波郡貴船の城主石黒重行が応永二年と同十八年に為修、武運を祈願して寄進したと記されていたという（高桑敬親氏の
（読解に拠る））。

2 宗良親王の南朝再興の企図

越宗良親王の入り

陸。さらに名古（奈良）浦に船を着けて、射水郡に同五年まで滞在。各地の南朝方武士と連絡をとつて、南朝政権の復興を図られた。越中御仮住のころの作詠として歌集『李花集』がある。

五宗良親王の入

國元年・暦応三年（一三四〇）に西赤尾の角淵氏が居た丸岡城に滞在されたとしている。

。越の国に住み侍りし頃、都の人の許へ申し遣ける

「雪つもる越の白山冬深し夢にも誰か思ひおこせむ」

。谷ふかく住み侍りし頃、さらに雪のみふりつみて月日の行方も覚えず侍りしかば

「谷ふかき雪の埋れ木までしばしあはではつべき春ならなくに」

これらの歌に、多少は五ヶ山中の風物を偲べると思われるが、史料文書にて史実をたしかめることはできない。

なお、親王は、興国五年二月、越中を去って信州大河原へ赴かれたのであった。

3 南北朝合一後の南朝遺臣たち

五ヶ山の南朝遺臣 畑氏一族郎党らのほかに、数多くの南朝遺臣の五ヶ山入りと土着について、高桑氏は、現在の五箇山三村の住民の姓を挙げて例示している（調査報告書『五箇山総合』）。

楮地区的篠塚姓は新田義貞の臣篠塚伊賀守重広の末裔。下梨地区的瑞願寺などの高田姓は、元は内島氏で楠正季の末孫。上梨・上平村下島などの高桑姓は新田系の郎党。その他、五箇山三村に見る、平瀬・石川・車・新田・浦辺・藤田・村田・丹保・田中・村上・藤崎・光田・赤石・桜井・花山・荒木・和田・来数・葛・川合・酒井・木本・小島・中川などを南朝遺臣にゆかりある姓氏と見なしている。

とにかく、以上のすべてが南朝関係に結びつくとはいいけれないが、南北朝時代の落人の五箇山中土着を考える参考になるであろう。

而して、『越登賀三州志』に載っている、下梨・漆谷・新屋・赤尾などの古城跡について、いろいろと口碑伝説がいいつがれているが、南朝方の抵抗拠点となっていたと思われる。

山崎家に残る 不滅の火

南朝方の武将、新田義貞が

延元三
延元

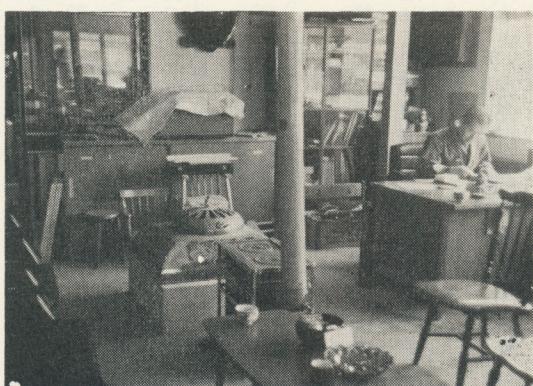
五ヶ山に逃れて再興を図った。そのとき刀鍛冶の藤島・宇治の二氏が同道して来り、刀を鍛え、武器を製作した。藤島は山崎家に身を寄せて三代八十年余、住んでいた。そして藤島は鍛冶の火種を火縄によつて持ち運び、藤島流鍛工の火を守っていた。その火種が今も護持されているのであるという。

その後、応永（一三九四～一四二四）のころ、五ヶ山の南朝軍が北朝軍に攻められて大敗した。そのとき、藤島は加賀の国の松任に逃れたが、子孫は連綿として在住、庭の一隅に刀を鍛える場所を遺存して、山崎家同様にこの火種を絶やさずに守っていたという。然るに、大正年間に一度、火種が消えたそうで、はるばる、この梨谷の山崎家へもらい火に来ていったということである。

甚三郎銘の刀もあったとのことだが、現存していない。

これが、建武の昔以来六百年間守られた「不滅の火」として口承しており、その名が高かつた。なお現在山崎家は城端町において木工所を経営しているが、火種は絶えることなく残っている。

因みに、藤島系の刀鍛冶については、加賀藩編纂の『加越能三州鍛冶系図』と『松任町史』に、刀工藤島友重について詳しく述べられている。



梨谷甚三郎の不滅の火 城端町の甚三郎家にて [昭和57年]

(三) 浄土真宗のひろまりと五ヶ山

1 越前の朝倉勢の五ヶ山侵入

朝倉勢の進攻

寛正二年（一四六一）、將軍足利義政は、越前の朝倉氏に飛驒および五ヶ山への侵攻を命じた。しかし、当時朝倉は、自国の内戦に忙しかったので、飛驒白川の内ヶ島・平瀬・市村など、旧小笠原勢を指揮して、飛驒の斯波氏・越中守護の畠山氏勢を攻め撃たせた。よって内ヶ島為氏は兵を進めて奥白川郷を征服して庄川を下り、寛正五年（一四六四）に南朝遺臣が拠っていた、保木脇の南朝遺臣の拠点、帰雲城を占拠して修築した。ついでさらに北進して五ヶ山にせまり、斯波勢の残党を掃討して、ついに利波郡川上三カ庄にまで侵出したという（『祇江記』）。

しかし、一時は平野部の川上の里まで兵を進めたであろうが、決定的な征覇であったとは思われない。当時、五ヶ山諸村は川上十郷内に属し、福光城主石黒氏の勢力下にあつた。

内島為氏と嘉念坊との戦い

一方、内島為氏の勢力が振起するに及ぶや、白川郷鳩谷の嘉念坊明教が反旗をひるがえし軍を求めて、白川に引返して、嘉念坊を逆襲した。明教は敗れて自刃した。

このとき、明教の一子明心の乳母は、五ヶ山新屋村の平瀬権左衛門の妻そよ、赤尾村角淵刑部左衛門淨徳の娘であつた。そよは、明心を抱いて林の中の草むらに身を隠していたが、間道を伝つて椿原に出て五ヶ山の赤尾へ逃れ

た。父淨徳は二人を連れて、即日井波へ脱出し、瑞泉寺にいた本願寺門主八世蓮如上人に救助を乞うた。しかるに蓮如もまた危険を感じ、二人を引取して、越前の自坊、吉崎御坊へ還つたが、朝倉氏の反感を避けて、明心ら三人を越前の永泉寺に預けて自らは京都に戻つた（『高桑敏耕著「五箇山誌」』）。

2 五ヶ山における念佛信仰のみなもと

人形山・金剛堂山

阿弥陀仏を信仰し、念佛によつて極楽に往生する仏教が、五箇山中に流布するのは、井波

篠塚藤之進
瑞泉寺開祖の綽如上人の入山に因つたとされ、また、赤尾の道宗によつて定着したとされる。

しかし、さらに年代をさかのぼつて、因つてきたみなもとがあつたと考えられる。
まず、人形山はすでに述べたように、元正天皇の養老年間（七一七～二三）、奈良時代に、白山・医王山を開山された、越の大徳泰澄大師によつて開かれたと伝えられる。原始的自然崇拜から仏教天台宗が関与した、白山信仰の山である。白山三社権現のうち、「大汝」峰の本地仏は阿弥陀如来であり、天台淨土教的阿弥陀信仰の山である。上梨の白山宮に平安末期の製作といわれる阿弥陀如来の立像が安置されている。

つぎに、金剛堂山は、文武天皇の御代（六九七～七〇七）の飛鳥時代に、修驗者役小角えんのおずくが開山したと伝えられる。この山も原始的山岳信仰と仏教の密教的信仰と習合した靈地である。而して小角の登攀のとき熊が道案内したという口承から、紀州（和歌山県）熊野三山の熊野信仰に結びつくと考えられる。天台宗系の修驗道場が設立されており、人形山と同じく、天台淨土教的阿弥陀信仰の山であろう。以上の両山とも、法然の淨土宗の専修念佛・親鸞聖人の淨土真宗の弥陀の他力本願に、さらに時宗の一遍上人の他力念佛に通ずる。

かくて、五ヶ山中においては、すでに汎淨土的念佛信仰が普及していたのであつた。なお、上平村新屋の道善寺

の前身、越前本覚寺下の平瀬道場に、阿弥陀如来を本地とする、熊野權現の形跡があるといわれる（井上銳夫著『向一揆の研究』）。

このほか、永正六年（一五〇九）、上平村楮の篠塚藤之進が、本願寺九世実如上人の教化を受けて入信し、五ヶ山中の真宗の弘布に力めた。以来、天台宗信者も改宗して、年毎に信徒の数が増加していったという口碑がある。

以上、道宗の布教活動以前に、すでに浄土真宗の念佛信仰を入れる素地がかなりできていたといえよう。

飛驥国西正寺の發祥地下梨寺 また、『飛州志 卷五』によると、永正元年（一五〇四）開基の照蓮寺の末寺として次の記事がある。

西正寺 同郷（小鳥郷）池本村ニアリ、同宗照蓮寺末寺、開基始祖积西唯、応永年中建之。○本尊^{（裏）}書日、方便法身尊形 大谷本願寺积実如^ス存^判、応永廿八年乙未四月廿日、越中国五箇山下梨村 願主西唯

と記されている。

その後八十三年を経て、永正元年に、西唯の縁者、西順が池本村に来て道場を開いた。これを甚助道場と称したという（『寺伝・飛驥』）。しかし、岐阜県の『清見村史』によると、実如は綽如であり、応永二十八年は辛丑で乙未でないとしている。とにかく綽如の時代ならば、五ヶ山への浄土真宗の流布は確かであろう。



篠塚藤之進の碑 上平村楮に建つ

3 赤尾道宗の真宗布教

生い立ちと 入信・布教

道宗の伝記・行状については、かなり伝説的な事柄が多い。文明七年（一四七五）、平瀬權左衛門の遺児弥七（道宗の俗名）は、まだ十三歳の少年であった。母そよと嘉念坊明心の行衛を求めてやまなかつた。叔父淨徳の話に従つて、九月初めごろ親の似顔を求めて、筑紫國の五百羅漢參詣に旅立つた。幾山河を越えて、越前の麻生津に着いて宿泊。若狭の小浜まで船で渡ろうとした。その夜の夢に一人の僧が現われて、筑紫へ出かけるよりも、当國の吉崎道場へ赴いて、本願寺の門主蓮如上人に真宗教化をいただいた方がよからうと告げられた。よつて上人に帰依して信心をいただこうとして、上洛した弥七は本願寺に日参。上人の身近かに接して、大信心を得て愛弟子となり、道宗と名乗つた。

その後、郷里の五ヶ山に帰り、道場（のち行徳寺）を設けてそこを拠点とし、不退不動の念をもつて浄土真宗の布教に精力的な活動を続けた。そして五ヶ山中全村挙げて門徒化せしめた。

道宗の行状

『蓮如上人行実』に、道宗の篤信を語る逸話が書きとめてある。

道宗は「一日のたしなみ」には自家の御内仏に、「一月のたしなみ」には井波の瑞泉寺に、「一年のたしなみ」には京都山科の本願寺へ詣つたという。

まことに畏仰すべき行状であった（岩見義著
赤尾道宗）。

また、「道宗覚書二十一ヶ条」は、道宗自らの心を内省し改悔した文章で、蓮如上人の御心を体得したものとして、切々と心をうつて止まない。とくに、

「こしようの一大事、いのちのあるかぎり、ゆだんあるまじき事」

の言葉は不滅の金言である。世界的に名高い板画家棟方志功は度々行徳寺を訪れて、道宗の人柄と信念に深く感動して、道宗の臥像とこの言葉を刻んで遺している。



板画「赤尾の道宗」 棟方志功刀

なお、これより先、五ヶ山に近い白川郷鳩谷村に、親鸞聖人の弟子善俊が建長五年（一二五三）に飛驒に入り、同七年に鳩谷の寺ヶ野（現在、寺尾）に道場を創建、嘉念坊の名を賜つて布教を始め、信徒を広げた。その後浄土真宗教線は五箇山にまでひろがつたといわれる（白川郷嘉念坊史跡保存会編『嘉念坊善俊上人と道場』）。

本願寺の対立

道宗の布教活動以来、五ヶ山に朝倉氏・本願寺

家臣だった高桑一派は、政治的に主家の勢力の進出を図り、道宗は本願寺勢力の伸張に力めようとした。高桑一派は上梨白山宮を復興して天台宗の振興を図ろうとし、道宗は蓮如の教えを奉じて、淨信淨行の妙好人として五ヶ山全域の真宗門徒化に献身。今日の真宗繁栄を齎した。

永正十年（一五六三）に、道宗の道場は寺号を認められて、赤尾の里

に行徳寺が創建されたのである。

五ヶ山十日講の成立

さらに五ヶ山中の村々に、井波瑞泉寺・伏木勝興寺・加賀国小松本覚寺・越前国鳥羽万法寺など、北国の有力寺院の信徒組織が結束し、両國のあちこちに道場が出来た。

また、農民によつて講が結成された。五ヶ山においては惣組織としての農民講の十日講が発足、各集落の支配者層の人々が多く参加した団体として、強力に活動した。

上平村細島の生田家・平村下梨の瑞願寺などに、その講関係文書が残つてゐる。家系の由緒を知り、中世五ヶ山

の社会構成を物語る好史料として、重要文書である（『平村史下卷』六五）。

4 地名「五ヶ山」の初見と「五ヶ山谷」の成立

「五ヶ山」という地名が文書に初見するのは、従来、上平村細島生田家蔵「方便法身仏像」の裏書に実如が署名した年月「永正十五年（一五一八）五月」と「五ヶ山荒山村」と銘記された文字とされていた。

しかし、最近、利賀村旧住高田彦三郎家蔵「方便法身仏像」の裏書に、実如の署名、「永正十年（一五一三）十二月」と「五ヶ山之内」の文字の銘記が発見されたので、前記文字よりさらに五年前にさかのぼると考えられる（『平村史下卷』六五三頁）。

つぎに、本願寺十代証如上人の記録された『天文日記』に、天文五年（一五三六）の七月、八月の条に、五ヶ山門徒中から差出した、本願寺への志納の事が載っており、五ヶ山の名が公称されており、當時、村名がかなりひろく知られていたようである。

五ヶ山の保名と「惣」の成立 ほかに、村落名として、五ヶ山中の地名の初見は、上梨白山宮の棟札の「文龜二年戊午」（一五〇二）と「越中国利波郡坂本保内上梨村」の文字である（『平村史下卷』六四）。

而してこの保名は、中世的な、官物や正税などを負担する中央官府領・国衙領として行政単位ではなく、別符名と考えられるのでなかろうか。すなわち、年貢徵収の単位としての、在地領主の開発勧農地域で、領主名が付けられたのでなかろうか（『富山県史・通史編』第一章第二節莊園の様相）。

とにかく、南北朝時代以来、各地に戦乱があつて、敗残兵たちが奥山里に遁げこみ、山村の人々にはなかなか物

騒な世の中になってきた。さらに支配者たちの年貢取立てや物資徴発が苛酷になり、これに対抗するには、結束が必要になった。そのほか、生活物資も一村のみでは自給自足できなかったために「惣」を組織して相互扶助の団結行動によらざるを得なくなつた。

これらのことは、単に五箇山中に見られる成行きではなかつたが、人間の社会の生活の生存には自然の動向として考えられるべきであろう。ここに「五ヶ山谷」の成立の糸口を求めてみたい。

古銘に見る 像・武具などが見られる。

さらに、五ヶ山の中世関係遺物として、鎌倉・南北朝・室町の諸期の年号の古銘のある仏

利賀南大豆谷の八幡社の仏像背銘は永和四年（天授四年一三七八）、上梨白山宮の仏像後頭銘は応永二年（一三九五）である（『平村史下巻六五二』）。利賀村百瀬谷の大野家（先祖權）所蔵の鎧・兜に応永三十一年（一四二四）の銘があつた。



僧形八幡神像背面刻銘

永和4年4月24日



白山宮木像後頭銘

応永2年卯月8日

（村史編纂室、赤外線撮）

このほか、前記白山宮の木像類は、鎌倉末期から室町中期の約二〇〇年間の製作、下梨の地主神社の狛犬と木像は南北朝期の作と、文部省の技官・嘱託によって調査鑑定されている。

5 本願寺の五ヶ山支配

本願寺勢力の伸張

赤尾道宗は戦国争乱の中にあっても政治的野心に立つことなく、ひたすらに師と仰ぐ蓮如上人の教えを奉じて、淨心淨行の妙好人として超人的に活動。五箇山全域の真宗布教に全力を挙げた。而して道宗の行動は自ら政治的勢力となつて、本願寺支配の道を開いた。

「実悟記」によると、道宗は永正十三年（一五一六）に入寂し、その後五ヶ山の宗教と政治の中心は、井波瑞泉寺の下寺、下梨の瑞願寺の修理亮乗資の方に移つた。この人は、五ヶ山近世史の初頭に名を顯わした、下梨村市助の先祖といい伝える。

武士勢力の終末

文明十三年（一四八一）二月十八日、砺波郡福光城主石黒光義は、予てから加賀の富権政親から依頼された砺波地方の真宗門徒勢の駆逐を実行することにして、井波の瑞泉寺を焼亡するために進発した。この企てを内聞した瑞泉寺では早速、近郷近在、郡内、隣郡の寺院・信徒に危機を触れ出した。伝え聞いた百姓たちは、鎌を持って馳せ参じた。

五ヶ山勢三百余人、近在百姓二千余人、婦負郡山田谷又は般若野郷の百姓千五百人その他数多かつた。そして石黒軍勢は医王山の天台宗僧徒を合わせて千六百余人が、井波から西一里（四一トロ）の山田川で対峙した。しかるに、加賀の医王山西山麓の湯涌谷の信徒二千余人が二手に分かれて、千人は医王山四十八か寺へ、千余人は福光城下へ押寄せて、両所を焼払つた。背後から不意打ちされた石黒勢は戦意を失つて敗れてしまつた。城主石

黒光義は家来三十五人を率いて、安居寺へ逃げのびて、そこで自刃したのであった。かくて石黒氏は滅亡し、砺波郡は小矢部川の東岸一帯は瑞泉寺領となり、西岸は本願寺の支配下に入つた（井波瑞泉寺文書『井波瑞泉寺記』）。

本願寺への志納と十日講文書

その後、五箇山地方は、毎年欠かさず、糸・真綿を本願寺へ納入した。下梨の瑞泉寺藏文書の、本願寺十代証如上人の書状に次のように記されている（平村史下卷六）。

又爰計無事之儀につけて、式百疋のはせられ候 誠用のおりふし、一入喜入候
従三五ヶ山一、毎年報恩講のこころさし、当年分糸十把・綿十把たしかに請取候、志難有こそ候へ、皆々法儀のたしなみ可^レ
肝要候、老少不定のならひにて候間、油断候てハ 無^ミ勿^ム体候、一時も早々、信心決定候ニ、つねに報恩の念仏申され候
へく候 あなかしこあなかしこ

（天文五年）八月十一日

証如 花押

越中国
五ヶ山門徒中へ

なお、この志納については『証如上人日記』の天文五年七月、八月の条にも記されている（同右、史二五六頁）。ただし綿とあるのは真綿（絹綿、つり綿）のことである。このほかにも、『証如上人日記』の天文六年十二月の条に見られる（同右、史二八参照）。

七日、自越中五ヶ山、去月廿一日ニ、毎年来候灯明料、糸貳把、又糸十把、綿十把、自講中糸貳把、綿壹把來候、以上糸十四把也、綿十一把也（後略）

しかし、本願寺の勢力は、蓮如上人が砺波地方農民へ布教のために井波瑞泉寺へ往還したところから、すでに五ヶ山地方にまで及んだと思われる。すなわち、各村落内の門徒の有力者を村の世話に当たらせ、さらに道場の坊守に任命して、志納体制を採っていたのである。

天文年間（一五三二～）の初めごろ、五ヶ山の村々の門徒を統轄する惣中組織が結成されて、十日講と呼ばれて

いた。しかるに、末年ごろに至り、井波瑞泉寺の政略的動静を受けいれることができず懇意を怠納したため、本願寺別院の金沢御坊から、厳しい叱りをうけた。さつそく世話役の有力門徒たちが定納の怠慢を認めて、八十六名の署名連判状を出して、今後の履行を誓約した。

現在、上平村細島の生田家にその文書が所蔵されている。また、下梨の瑞願寺にもその写本が残っている。

前書は次のとおりである（同右六五八、頁三九参照）。

申定候条々

一 十日講依致^ニ如在^一 御坊様曲事之由 被仰出候 尤驚入存候 於^ニ向後^一者 此人數致^ニ如在^一間敷候 若無沙汰仕候者

淨宗可^レ被^ニ申上^ニ之事

一 京都へ毎年進上仕候御志之系綿之儀 致^ニ如在^一間敷之事

一 御公用不沙汰之儀 曲事之旨 被^ニ仰出^ニ候 尤存候 於^ニ向後^一者 如在^一間敷之事

右条々於^レ背^ニ此旨^一者 堅可^レ致^ニ成敗候 仍定所如^レ件

連判人の名の中に、武士の姓氏とみるべきもの、村落名を姓氏としたものなどが歴然としている。修理亮乗資は下梨瑞願寺の住職であり、図書・藤井などはいまも現存している。とにかく中世的色彩が濃くて興深く、貴重な文書といえる。

6 一向一揆のころ

朝倉一族の内乱

勢力が及んだという。

然るところ、朝倉氏に内紛が起つた。教景（のりかげ越前守護孝景の子、名は小太郎）は長子の元景をうとんじて近江国に遠ざけ、庶子教景（敏景）に家督を継がせようとした。時に元景が一向一揆に加担したので、反本願寺党の教

景は、越前の和田本覚寺・超勝寺・鳥羽万法寺などを加賀その他の国外へ追放し、各寺院および本願寺の本拠吉崎御坊などを焼払った。

これに対応して元景は、近江より美濃を通り飛驒白河郷・五箇山赤尾谷に入り、赤尾道宗・高桑氏を率いて金沢の尾山御坊に拠って越前へ攻めこんだ。しかし敗れて、元景は傷死した。本願寺九世実如上人は回地を教景に求めたが聞き入れられず、却て、加越能・出羽の信徒が越前を通過して京都入りすることを遮断した。

このため、これら真宗信徒は加賀から五箇山・白川の道を採つて山科本願寺へ参つたので、沿道の太美山村刀利に泊り小屋が出来、上平村桂には戸口が多くなつて賑い、西赤尾は町と呼ばれるほど賑つたといわれる。

越中桂と小瀬の池 ノ平

また、桂は、天正八年（一五八〇）、金沢の尾山御坊が織田信長の部将柴田・丹羽・佐久間などの軍勢に攻められて、兵火に罹つたとき、金沢の専光寺など、加賀・越前の寺院・信徒が多く逃げてきて、一時は戸数三〇〇、人口三〇〇〇人となつたとさえいわれた。数字的には確かめられないが、一向一揆当時の五箇山中の庄川流域動勢の一齣^{こまく}を物語るとものであろう。

このほか、上平村小瀬の後にある池ノ平にも、加賀・越前の僧侶・信徒が遁入して住み、一時は集落を成していたといわれる。以上、口碑であるが当時の状勢をうかがわせると思う。

石山合戦後の本願

元亀元年（一五七〇）、本願寺顕如光佐は一向一揆を起こして、織田信長に対抗した。信長は兵を出して、大坂石山にあつた本願寺（現在の大坂城址）を攻撃した。以来、天正八年（一五八〇）まで、十年間交戦した。これがいわゆる、石山合戦である。

この時、勝興寺の佐計顯栄、瑞泉寺の佐運顯秀らが越中の一向宗徒を多く率いて防戦につとめた。五ヶ山地方の門徒衆も加勢して奮戦した。しかし、ついに敗れて堂宇焼亡。正親町天皇の仲裁で、顕如は信長と和睦し、石山か

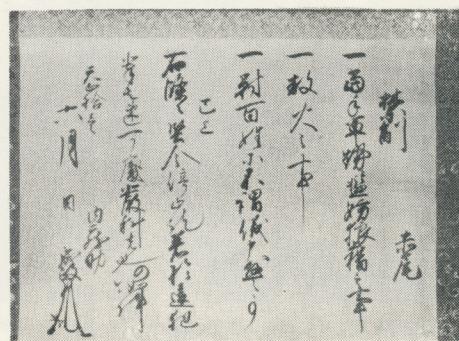
ら紀州鷺森・和泉の貝塚に移った。

その後、同十三年（一五八五）に石山に帰り、同十九年に京都堀川に寺地を与えられて、今日の西本願寺を建立した。一方、顯如の長男教如光寿は、父の和戰を肯わず、なおも信長に対抗した。文禄元年（一五九二）に父の死後、法嗣をついだが、豊臣秀吉から隠退を命じられた。しかし、慶長七年（一六〇二）に京都六条烏丸に、徳川家康から寺地の寄進をうけて、今日の東本願寺を建立した。かくて、本願寺が東西に分派したのであった。

佐々成政の天正八年（一五八〇）九月、織田信長は、上杉方の攻勢に対し、佐々成政を越中へ移し

郡に進出して、越中の大半を征服したので、砺波地方も再び武士支配下に入った。

しかるに、翌九年の春、信長が「馬揃え」を催して、近畿・北陸の諸大名を召集した。成政も上洛した。その留守に乗じて砺波郡の瑞泉寺・勝興寺・善徳寺などが門徒衆とかたらって、一揆の氣勢を挙げようとした。よって、夏から秋にかけて成政の部将前野小兵衛らが、瑞泉寺・勝興寺を攻撃して焼払った。瑞泉寺七世佐運顯秀は弟の准秀とともに、一時、五箇山へ避難した。顯秀はしばしば、上杉景勝の来援を請うた。景勝は五箇山の宗徒に出援を約した。しかし、実現をみなかつた（『平村史下卷六六』）。



佐々成政制札 上平村真木・真田治悦所蔵

教如上人の抵抗

天正十年（一五八二）四月、本願寺第十二世光寿教如上人は、越後の上杉景勝と結んで、五ヶ山地方に到り、その勢力の再起を図ったが、翌年、佐々勢は赤尾に侵攻して制圧した。

同年六月、赤尾に制札を立てて還信した農民の安堵を保証したのであつた（上平村真田家藏（平村史下）卷之六〇貞史四一参照）。

同年四月城端善徳寺からこの報せを聞いた、上杉景勝はとりあえず、南砺の一向衆徒が越中・能登の一揆衆と協力して織田軍佐々勢に抵抗するようになると書面を発した（寺藏文書）。よつて、瑞泉・勝興・善徳の三寺は、南砺の一揆勢を指揮して、頑強に成政に抗したが長続きしなかつた。景勝は五ヶ山の真宗門徒に、甲斐（山梨県）の武田勝頼との謀計ができたから、支援近きゆえ、奮起するように促した（旧城端町荒木文平所藏文書）。

そのころ教如上人は、飛驒白川郷萩町を経て利賀村に到り、さらに下梨に来て、同村の来栖・三明（現在の相倉・見座・中畠の三集落）などを拠点として滞留したが、成果を得ないで、城端善徳寺に入ったといわれる。その後、成政は、越中における上杉勢を駆逐して、国内を制圧した。

加賀藩の成立

成政は富山城を居城として、平野の中央にて勢威を張つた。成政は本能寺の変後、主家織田氏の再興を志して、上杉氏と前田氏を制圧して北国を統一しようとした。天正十三年に前

田方の能登の末森城を攻めたが敗れた。

秀吉は成政の野望を打ちくだくために数万の大軍を率いて、前田利家とともに、越中に進軍して成政を降伏させた。ここにおいて秀吉は成政には新川郡のみを支配させることにした。他の三郡を利家に支えた。

二年後、成政は秀吉の不信を買って、肥後国に移封されたが、失政のために、わずか一年にして召還されて、自刃を命じられて滅びた。かくて、新川郡は利家に加増されて、越中全部が前田家領となり、加賀・能登・越中三国を支配する加賀藩時代を迎えたのであった。